

金木の
かたがりべ

第14集



発行 わがふるさとを探る会

金木の かたがりべ

〈表紙解説〉

金木町喜良市集落の東側、小田川に沿って約七キロ上流をさかのぼると、女瀧・男瀧の二段になった「藤の瀧」に達する。

「藤の瀧」は、金木町の作家太宰治の「魚服記」の舞台に設定されたといわれる（このことは本誌第十三集で解説）。

ここから五〇〇メートル上流に小田川ダムが造成された。

この附近は、安山岩という黒い岩盤が露出しており、多々良沢・曲師沢・大典沢・九兵衛沢・金兵衛沢などを集めて溜池となっていたのだが、流域が狭少で、下流の田圃では水不足のため、水争いが絶えず、渇水期には村人総出で藤の瀧の上流で、「雨乞い祭り」など催したものである。

一九六六（昭和四一）年ダム工事着工以来二十六年、一九九二（平成四）年、ダムの完成と共にほ場の整備・用排水路の新設完備して事業は完了、近隣市町村三千九百ヘクタールの水田に営農の安定を計っている。

（木村）

金木
二六二

巻頭言

発刊に寄せて



金木町中央公民館運営審議会

会長 成田 亀逸

わが町には、数多くの旧所名跡がある。

しかし、その根拠となる謂われや、年代など知らない町民が多いように思われる。

わが町の嘉瀬地区に二十数年前から「わがふるさとを探る会」が誕生し、ふるさとの神社仏閣、旧所名跡を調査研究され、伝説や民話をおりませて「ふるさとのかたりべ」にまとめあげ、発表されていることは、広く町民のための学習活動の資料となるものである。

町づくり村づくりにも生涯学習活動の必要性が強く叫ばれて

いるおり、まことに当を得た資料である。

この度「ふるさとのかたりべ」第十四集発刊の運びとなったことは町の貴重な資料であり、財産でもある。

このように、古きを訪ね、先人たちの歩んだ生活の跡を、まとめあげた「わがふるさとを探る会」のみなさまのご苦勞に対し、深く感謝申し上げます、第十四集「ふるさとのかたりべ」発刊に寄せることばに代える次第である。

かたりべ第十四集

目次

表紙解説
カ
ッ
ト

《巻頭言》 発刊に寄せて	成田 亀逸
満洲放浪記	逢坂 伸三 1
自分史、欠陥人間	白川 章一 6
随想 小山内校長と永沢校長	中谷 金四郎 14
随想 津軽風物「ガッチャン・ポー」	木村 治利 16
戦いと和のはざまの村人	山中 長三郎 17
ふるさとくろいし紀行	櫛引 八千代 27
黒石地方の史跡散策	木村 治利 30
〔文芸〕 詩・短歌・川柳・俳句	原田 万治 50
旧曆に寄せる	38

高砂ヤーものがたり	秋元 惣之進 57
木造馬ツコ市風影	山中 長三郎 63
岩木川水運や蒔田集落等について	白川 兼五郎 65
金木城址の所在は	福士 貞蔵 68
交通の変遷について	佐野 駒三郎 69
金木町神明町遺跡調査	県教育庁 70
筆名・太宰治	山中 正津 73
村の笑い話コ 五扁	森 平
私は被害者だ	15
乾田に慈雨	37
アクタレ婆ア	26
盗人の理屈	64
私の名前	29
会員名簿・赤エンピツ	木下 清一 71

復刻版『金木村誌』



満洲放浪記

逢坂伸三

物心がついた時、私は四才ぐらいで現在の中国東北部（旧満洲、以下満洲という）の林口^{リンコウ}という所だったと思う。

父が南満洲鉄道株式会社（旧満鉄）に勤務していたこともあって、小学校を三回も変わるほど転々とした。林口の次は勃利^{ボリ}というところへ移ったが、治安が非常に悪く毎夜匪賊が出没し、その度にサイレンが鳴らされ私たちは常におびえていた。そのため父たち社員は兵隊ではないのだが拳銃や小銃などで武装して通勤していた。しかし、反面昼間は平穩そのもので私は社宅から若干遠くにあった幼稚園に通ったりもした。

気候は、内地（当時我々外地に居住していた人たちは、日本本土のことを内地と呼称していた）とくらべて夏はさほど変りなかったが、冬は零下三十度を越える厳しい寒さで目はマツゲが凍りつくは、耳が凍傷で痛くなるはそれこそひどいものであったが、雪はそれほど降らないので校庭に水を張り、凍らせた氷

の上でのスケートは、何よりの楽しみの一つでもあった。

鄭家屯^{テイカトン}に移った年、昭和十六年四月小学校へ金ピカの一年生として入学したが、この時から学校は在満国民学校と改称されその年の十二月八日に太平洋戦争が始まると戦時色が濃くなり我々小学生でも軍事教練の真似事や、防空演習などを何の不思議もなく行っていたのである。その次の学校は白城子^{ハクジョウシ}というところだったが、短期間だったのかあまり深い印象はない。

そして、在満中最後の学校が牡丹江^{ボダンコウ}明国民学校だった。この牡丹江市は、第五部隊が配備されかつて太平洋戦争緒戦シンガポール攻略の際、名声を馳せた山下将軍がいた所とあって、民間人は勿論だが兵隊も大勢いて街は活気に溢れていた。街は中心部、第一、第二新市街からなり、小学校三校、中学校三校（うち高女一）、デパート二、それに大和ホテルという大ホテル、映画館などが建ち並んでいた。

私が住んでいた所は円明街というところで、街の中心近くにあり、歩いて二、三分のところにある円明国民学校へ通っていたが、その規模は鉄筋コンクリート三階建てで、全館スチーム暖房、水洗トイレ、ダイヤル式電話等、いたれりつくせりであったが、私が引揚げて来てから二十数年以上経ってからの内地での生活環境が、五十有余年前の満洲では極く普通のことだったのである。

鉄道は現在の新幹線と同じ広軌のレールで、当時、世界から注目されていた特急「アジア号」が黒い煙を吐きながら赤い夕陽の曠野を爆進する光景は壮観そのもので、今でも鮮明に脳裏に焼きついている。

以上が日本人居住区での様子だが、これが一步満洲人が住む区域に入ると一変する。土やレンガ建ての平屋が建ち並び、鶏、アヒル、豚が柵もなく放し飼いである。豚は黒毛で私が白い豚もあることを知ったのは引き揚げて来てからである。

最近、黒豚とかいってグルメ嗜好的になってきているようだが一寸変な気がする。逆に、黒い箸のクラスが向こうでは尾が白く長かった。食物のことになると千差万別である。気持ちが悪く、不気味なものが店頭に所狭しと陳列されていてそれを満人達は、無造作に掴み箸の中に放り込んで買って行く。

一、二紹介すると豚の首の丸煮にしたものとか、生きたカエル、雷魚、その他種々雑多である。どのように料理するのであろうか見たことがなかったのでわからないが、今、盛んにテ

はじめた。

私たちの担任の先生も出征していった。授業中は厳しい人だったが一旦放課後になると宿直室へ皆を集め怪談や、昔話を聞かせたり、夜になると星座を教えてくれたりしてとても人気者の先生だった。

このように一人、二人と出征していく先生が多くなるので、その代りに兵隊になる前に先生をしていた人がやって来た。陸軍や海軍の軍服を着たまの姿で授業をするのだが、何だか異様な感じもした。

そうこうしているうちに、忘れもしない昭和二十年八月九日正午頃、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響く、と間もなく重々しい飛行機の爆音が聞こえてきたと同時に耳をつんざくような音がした。そしてあわてて防空壕へ飛び込んだが天井からパラパラと土砂が落ちて来た。全く突然のことでは何があったのかさっぱりわからず只、おびえているだけだった。しばらくしてサイレンの音が止み、様子を見に行ったら来た人たちの話によるとソ連機が爆弾を落として行ったようだというので恐る恐る指差した方角を見たところ黒煙を上げて建物が盛んに燃えていた。何でも電信電話局らしいとのことだった。この日から悪夢のような私たちの日々が始まったのである。

冒頭にも述べた如く、私は小学校を三回も変ったほど転々とし、その最後の牡丹江、そして五年生から始まったのが以下述べる体験記……なのだ。

レビで放送されている中国料理や韓国料理などを見るとヨダレが出るほどまそうに見えるが、その料理方法はどんなものか想像がつかない。

風習について述べてみると、異様と思っただのは葬式である。

日本では人が死ぬと親族や近親者が涙ながらに静かに葬儀を営むのが普通だが、あちらの方は笛やカネ、太鼓を鳴らしながら行列をして行く。そして棺桶は、赤を主としたケバケバしい色に塗られた大きなもので、本人が死ぬ前から買って家の玄関の所に立て掛けておく。この棺桶が大きく、飾りが多いほど金持ちということだった。そして、墓の前では泣子^{ナキゴ}という人がいて値段の分だけ、大きな声を上げて泣くという商売もあった。又、親より早く死んだ者は親不幸といわれて野山へ捨てられた。学校で近くの山へ遠足に行った時、捨てられて野犬などに喰われて散らかっていた白骨を数多く見たが、慣れると別に何とも感じなくなっていた。満人の家は前にも述べたが暖房はストーブではなく、オンドル^{オンドル}といって床下が煙突のような空間があり、家の片隅の焚口から薪や、木屑などをくべるとそれが土台下を回りながら部屋中を暖めてくれ、零下三十度を越える寒さでも家の中では裸でも平気なのである。

このように大らかな大陸でのんびり暮らしてしたのは昭和十七年春頃まで、その後は戦局が日増しに悪化し、私たちの学校でも高学年になると陸軍幼年学校へ行く者や、志願して海兵団へ、あるいは予科練へ行く者など戦事色がひしひしと感じられ

明日にでもソ連の軍隊が攻めて来るといいう情報が伝わりとにかく少しでも内地に近い方へ避難した方がよいのではないかと

いうことで、各自リュックサック一つに必要な物を詰め込み八月十一日夕方、牡丹江駅に行き列車に乗り込んだものの、ソ連機の機銃掃射で被爆したため機関車が動けず車中泊となってしまう。翌十二日夜、ようやく汽車は動き出したもののノロノロ運転、理由は空襲を避けながらのことだという。そうこうしながら十五日、吉林駅^{キリン}に着き正午を迎えたとき何やら雑音混りのラジオ放送がスピーカーから流れてきたと思っ

ているうちに大人たちが皆、一斉に泣き出した。それは天皇の玉音放送で日本が無条件降伏、つまり戦争に負けたのだという。これでは皆、泣く筈だ。

日本は神武以来神の国であり、絶対他国に負けることはない

と信じて「鬼畜米英我らの敵だ」「撃ちてしまむ」「一億一心日の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に四年近くも食うや食わずで戦って来たのだから無理もない話である。それはそれとしてともかく吉林駅を後にして走り出し何日から経った後、最終目的地の撫順^{ブジュン}駅へ着いたのである。

ここは、石炭が地上に露出していて、世界でも有数な露天掘りの採掘場があり、その規模は後から聞いたところによると縦、横六キロに二キロという途方もないものだという。そのような街に私たちは住みつき一冬を越す羽目となったが、避難民が溢れて四階建てのアパートが何十棟もあったにもかかわらず八丁

日ソ開戦後における中国東北地区
一般邦人の避難経路、主要遭難地点、越冬地点等概見図



(註) 便宜上、当時の行政区画による。資料・中国残留孤児・厚生省援護局編/きょうせい発行

間二室ほどに二〜三家族という窮屈な生活を強いられた。部屋にはスチーム暖房があるので寒くはなかったが給水事情が悪く水圧が弱くて水洗トイレが満足に使えず閉口した。それに加え食糧事情は更に悪く、米がないので高粱にカブを薄切りにしたのを入れそれを塩で味付けしただけのお粥みたいなものが毎日の主食だった。

このような生活では栄養失調にならない訳がない。おまけに不潔な生活が続いているため、ノミやシラミが大発生し、発疹チフスが蔓延した。この病気は伝染病に指定されていて四十度以上の高熱が続く。そのため多くの避難民が毎日のように死んでいった。私も罹ったが、運がよかったのか二週間ほど熱になされ続けながらも一命を取り止めたが、私を看病した母も罹り、二十一年の一月に行年三十三才の若さでこの世を去った。

それでも我々満鉄社員の家族は不便な中でもどうにかあったが、満蒙開拓団の人たちは悲惨なものだった。暖房設備はあるもののボイラーを焚くことが出来ずだだ広い学校の講堂や、体操場で雑魚寝という状態で、勿論布団などはある筈がなく、薄い毛布一枚では風邪を引かないのが不思議である。毎日何十人という人たちが死んでいく。そしてその死体を山と積んだ馬車が列をなして通り過ぎて行くが行先は火葬場ではなく、河原へ運んで積み上げ石油をかけて焼くのであり、その真黒い煙が毎日のように天を焦がしていた。

このような日々明け暮れているうちに初夏を迎えた六月、

内地引揚げが決って撫順を出発したものの途中で汽車は錦洲などあちこちに停車しながらもようやく港のあるコロ島に到着引揚船に乗り込んだ。船は摂津丸(九、〇〇〇トン)といって終戦までは輸送船だったそうで、機銃の台座がその尺残っていたり、兵隊や軍馬などを運んだということで船室は船員用だけ、暗い船底が我々の居住区だった。途中死んだ人は、日章旗にくるんで重りをつけ水葬にされたが故郷を目前にしての死とあって、さぞかし残念だったろうにと思わずはいられなかった。

船は玄海灘の荒波にもまれ、我々は船酔いながらも広島島の宇品港へ接岸したのは六月二十五日夕方だった。

あれから五十有余年、まかり間違えば中国残留孤児となったであろう私を連れて帰って来た父は三年前九十才で生涯を終えた。

無口で厳しかったが、今は感謝の念一杯で過ごしている今日この頃である。

※ 長い年月が経っており、断片的な記憶に頼りながらの記述故、日付の誤りも多々あるかと思いますが、思いのまま拙い文章に纏めたものでありご笑読頂ければ幸いに存じますと共に、心よく採用の上、「かたりべ」の貴重な紙面をさいて掲載の労をお取り下さいました木村治利氏を始めとする同人の方々に萬感の謝意を表します。